

ロナプリーブの治療を受ける 患者さん・患者さんのご家族の方へ

監修 東邦大学医学部 微生物・感染症学講座 教授 舘田 一博 先生

新型コロナウイルス感染症とは？

- ◆ 新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) による感染症は、2019年12月に報告されたのち、ヒト-ヒト感染によって流行が世界的に広がっており、我が国でも、多くの感染者が報告されています。よく耳にする COVID-19 は、新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) により引き起こされた感染症、つまり疾患名を指します。
- ◆ 症状としては、発熱・呼吸器症状 (咳や咽頭痛)・頭痛・倦怠感などのインフルエンザ様症状がみられることが多いですが、特有の症状として、嗅覚・味覚障害の頻度が高いことが特徴です。
- ◆ 新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) に感染した患者さんの約 80% が発症から 1 週間程度で回復すると報告されていますが、一部 (約 15%) の患者さんでは発症から 1 週間程度で酸素投与が必要となり、さらに発症から 10 日目以降に集中治療室での酸素投与が必要になるなど、重症化する方もいらっしゃいます。
- ◆ 一般的には、飛沫感染、接触感染が感染経路と考えられています。また、唾液中のウイルス量が多く、マイクロ飛沫感染 (5 μm 未満の微細な飛沫粒子による感染) の影響も指摘されており、閉鎖された空間において、マスクをつけずに近距離で人と会話するなどの環境では、咳やくしゃみなどの症状がなくても感染を拡大させるリスクがあるとされています。発症前の自覚症状がない時期にも感染性はあることが新型コロナウイルスの特徴で、このことが感染予防を難しくしています。
そのため、感染を防ぐためには、手洗い・手指消毒の徹底やマスクの着用、人との距離をとるなどの対策を実施するほか、三密の回避など、できるだけ人との接触を避けることが非常に重要になります。感染された患者さんご家族と一緒に生活される場合にも、可能な限りお部屋を分ける、食事の時間をずらす、換気をする、会話をする際にはマスクをするなどの工夫を心がけてください。また、ご家族の方は喉の違和感など軽い体調変化であっても、気づいた際には早目に検査を受けるようにしてください。

「飛沫感染」：感染者の飛沫 (くしゃみ、咳、つばなど) と一緒にウイルスが放出され、周りの人がそのウイルスを口や鼻などから吸い込んで感染すること

「接触感染」：感染者がくしゃみや咳を手で押さえた後、その手で周りの物に触れるとウイルスがつきます。他の方がそれを触るとウイルスが手に付着し、その手で口や鼻を触ることにより粘膜から感染すること

「三 密」：密閉空間 (換気の悪い密閉空間である)、密集場所 (多くの人が密集している)、密接場面 (互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や共同行為が行われる) という 3 つの条件のある場では、感染を拡大させるリスクが高いと考えられています。

参考：厚生労働省 HP 新型コロナウイルスに関する Q&A (一般の方向け)
参考：新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 診療の手引き
(2021 年 7 月確認)

ロナプリーブについて

ロナプリーブは、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）による感染症に対する治療薬です。

◆ このお薬は、SARS-CoV-2 に結合する「カシリビマブ」と「イムデビマブ」という 2 種類の抗体*を混ぜ合わせて使用します。SARS-CoV-2 に 2 種類の抗体が結合することで、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の増殖を抑制すると考えられています。

※抗体：特定の異物にある抗原（目印）に特異的に結合して、その異物の生体内からの除去を促す分子

1 回の点滴静脈注射を行います。

使用回数

以下の投与量に基づき、1 回の点滴静脈注射を行います。

使用時間

体調に異常がないことを確認しながら、20～30 分程度で点滴します。



	投与量と投与方法	使用回数
成人の患者さん	2 種類の抗体をそれぞれ 600mg ずつ混ぜ合わせて、1 回の点滴静脈注射を行います。	1 回
小児の患者さん (12 歳以上かつ 40kg 以上)		

ロナプリーブによる治療をはじめるにあたって

治療対象となる患者さん

- ◆ ロナプリーブは、新型コロナウイルス感染症の重症化リスク因子を有し、酸素投与を必要としない患者さんが対象で、重症化リスクを低減する効果が期待できます。



- ◆ なお、ロナプリーブの臨床試験では、下記の重症化リスク因子を有する患者さんが対象でした。

- 高齢の方
- 肥満の方
- 心血管疾患（高血圧を含む）を有する方
- 慢性肺疾患（喘息を含む）を有する方
- 1型または2型糖尿病の方
- 慢性腎障害を有する方（透析患者さんを含む）
- 慢性肝疾患を有する方
- 医師の判断に基づく免疫抑制状態と考えられる方
（がん治療、骨髄または臓器移植、免疫不全、コントロール不良のHIV、AIDS、鎌状赤血球貧血、サラセミア、免疫抑制剤の長期投与の場合など）

治療対象とはならない患者さん

高流量酸素や人工呼吸器管理を要するなど、重症の患者さんは治療対象ではありません。また、重症化リスク因子を有しない患者さんも治療対象ではありません。

ロナプリーブによる治療をはじめるときにあたって

以下の患者さんは、ロナプリーブによる治療を特に慎重に行う必要があります。あてはまる場合には、治療を行う前に、必ず医師、看護師、薬剤師にお申し出ください。

◆ 過去に注射剤などで重篤なアレルギー症状（過敏症）を起こしたことがある方

強い過敏症を起こしたことがあるお薬や、それに似た成分のお薬を使用すると、再び過敏症を起こす可能性が高く、場合によっては命にかかわることもあります。

◆ 妊婦または妊娠している可能性のある方

治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ、使用されます。



◆ 授乳中の方

治療上の有益性と母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続または中止が検討されます。



副作用について

ロナプリーブの治療により、副作用が現れる可能性があります。症状発現の際には、医療従事者により、適切な処置がなされます。

特に下記の症状を感じた場合には、すぐに医師、看護師、薬剤師にお申し出ください。

インフュージョンリアクション

ロナプリーブを含むモノクローナル抗体製剤と呼ばれる薬を点滴したときにおこることがある体の反応で、過敏症やアレルギーのような症状が現れます。

- 発熱
- 悪寒
- 吐き気
- 不整脈
- 胸痛
- 胸の不快感
- 力が入らない
- 頭痛
- じんま疹
- 全身のかゆみ
- 筋痛
- 喉の痛み など

重篤な過敏症

薬に対してからだの免疫機能が過剰に反応することで、全身に起こる急性アレルギー反応がまれに現れることがあります。

- 全身のかゆみ
- じんま疹
- 皮膚の赤み
- ふうつき
- 吐き気・嘔吐
- 息苦しい
- 冷汗が出る
- めまい
- 顔面蒼白^{そうはく}
- 手足が冷たくなる など

上記以外の症状が現れる可能性もありますので、投与前後や投与中に気になることがあれば、医師、看護師、薬剤師にお申し出ください。

..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..

すべての革新は患者さんのために



中外製薬



ロシュグループ